
ニセニセイギ

ムレナシ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ニセニセイギ

【Nコード】

N3094F

【作者名】

ムレナシ

【あらすじ】

干渉力 それは世界に干渉する力。親友の幼馴染である黒女笑顔という名の女子に絶賛片思い中の主人公は、黒女笑顔がチャラ男に絡まれている現場に遭遇する。そんな美味しい場面を主人公が逃すはずは無く、颯爽と助けに行くのだが……。裏の世界へと巻き込まれていく主人公。黒女笑顔 闘う日本人形。

第1章「黒女笑顔」：第1話「黒女笑顔」（前書き）

初めまして、ひいと言います。宜しく願います。

書くからにはそれなりのものを書きたいとは思っていますが、趣味で書いているので横着な部分もチラホラ出てくるかと。そういう部分は指摘してくれると嬉しいです。初作ですので、書きながら出来るだけ成長したいと思っています。

設定がまだ固まってるとは言いがたいので、大幅に変更することもあるかもしれません。

次回更新予定日不明。

第1章「黒女笑顔」：第1話「黒女笑顔」

ぼくはおひめさまをまもるきしになる。

わたしはおひめさま。きしさんにまもってもらうおひめさま。

くろめえがお

黒女笑顔。名前に反してその笑顔は、正に清純な乙女のそれ。もしその天使のような笑顔が作られたものだとしたら、正に黒女笑顔という名前の通りではある。黒女笑顔が黒女笑顔であるなれば、大半の人間は人間不信に陥ってしまうだろう。周囲には、黒女笑顔は全く黒女笑顔の姿を見せない。名前から黒女笑顔を疑ってしまうているとはいえ、黒女笑顔はやはり完全に黒女笑顔ではないのかもしれない。

黒女笑顔。クラスメイト。親友の幼馴染。たまにツンデレ。俺の通う高校のアイドル。恐らく無意識に、天使の微笑みで思春期真っ盛りな男どもを魅了している。無論俺もその一人だ。ただ、無意識であると断定できないのはやはり黒女笑顔という名前のせいである。全く彼女の両親は何を考えて黒女笑顔という性質からはほど遠い彼女に黒女笑顔という名前を与えたのだろうか。あるいは、黒女笑顔という名前を付けられたせいで逆に彼女のような女性となったのかもしれないが。

黒女笑顔。ニット帽愛好家。身長はかなり小さい。そして胸はでかい。つまりはロリ巨乳のジャンルである。黒い長髪と黒い二重の瞳。白い肌。真っ赤な小さな唇とほんのり赤い頬。整った鼻。その小さな身体と腰の辺りまで伸びた潤った黒い長髪と余りにも可憐な顔は日本人形を想像させる。美しさ、可憐さ、儚さ。そして恐さ。正に動く日本人形。生ける日本人形。人間人形。人形人間。ニット帽を被った現代版日本人形。黒女笑顔。黒い髪が似合う笑顔の女。それとも、黒い笑顔を持つ女。

黒女笑顔。剣道部所属。むさ苦しい男どもの群がる地獄に咲く一

輪の花。運動神経抜群な彼女の剣道の腕は、男子を含めても部内でトップである。だけど一度も大会には出ない。ちょっとした事情がある。無論、彼女が大会に出てしまえば実力も見た目も最上級、ハイエンド級なので騒がれてしまうのは間違いないのでそれを避けるのこともかもしれない。本能的に彼女もそれを分かっているのだろう。あるいは、彼女が黒女笑顔なれば意識的にそれを理解しているのだろう。闘う日本人形。侍ガール。

黒女笑顔。彼女はその美しさゆえか、ナンパやストーカー、強姦の類に良く出会う。それらを防ぐために彼女は剣道部に入り、外ではいつも竹刀を携帯している。彼女は竹刀で獣と化した男どもを追い払えるようになったが、いつのまにか彼女の剣は剣道をするため剣でなく人を殺すための剣となってしまう、そのせいで彼女は大会には出ないようにしているらしい。強者と試合すると無意識のうちには人を殺す剣になってしまいかもしれないからだそうだ。無論人を殺すための剣というのは、彼女が言葉の綾で言っただけだろう。

黒女笑顔。容姿端麗。頭脳明晰。運動神経抜群。純粹無垢。はっきり言って はっきり言わずとも完璧である。完璧は人を遠ざける。完璧すぎるものは恐ろしい。しかしながら、彼女が偶に見せるドジっぷりが周りにその恐さを感じさせない。完璧じゃないからこそ完璧以上。完璧異常。もし彼女が黒女笑顔であるならば、意識的にそれを装っているのかもしれないが。

黒女笑顔。黒女笑顔であることを疑わずにはいられないほどに魅力溢れる彼女ではあるが、やはりそろそろ黒女笑顔疑惑について考えるのは止めようと思う。黒女笑顔という名は彼女の責任ではないのだ。彼女を疑うことは彼女に失礼であるし、俺にはそんな資格はない。とは言っても人間誰しもが善と悪の部分を持っている。彼女はきっと黒女笑顔ではなく、黒女笑顔でもある。何だかんだ言っても黒女笑顔疑惑を捨てきれずに彼女を疑っているのは、彼女の魅力が凄過ぎるからな訳ではない。今となつては本当か幻か自信がないけれど、俺は一度 というか今日、黒女笑顔に出会ってしまった

からだ。そして黒女笑顔な彼女も良いと思う心が芽生えてしまったからだ。人間誰しもが善と悪の部分を持っているように、人間誰しもがSでありMである。奴隷少女黒女笑顔。女王黒女笑顔。

黒女笑顔。黒女笑顔。黒女笑顔。黒女笑顔。黒女笑顔。黒女笑顔。黒女笑顔。

黒女笑顔。絶賛片思い中の相手。

黒女笑顔。そして今俺の隣にいる女性。恋人や将来の伴侶などの意味で隣にいるのならば嬉しいけれど文字通り隣にいただけ。夕方偶然帰り道に通り過ぎる公園で彼女が所謂チャラ男に絡まれていたので、俺は颯爽と現れ彼女を助けて、今そのお礼にとジューズを奢ってもらって公園のベンチに二人で座って会話をしている。無論、嘘だ。

黒女笑顔。彼女は闘う日本人形。

「嫌がつてんだろ。離せよ」

黒女笑顔を掴むチャラ男の手を無理矢理離れた俺の言葉にチャラ男は睨みを返す。それだけ。たったそれだけで。お姫様を守る騎士になったような気がして少々悦に入っていた俺は、現実へと引き戻される。本気で理解する。こいつはただのチャラ男ではない本物であると。

「っ……」

言葉が出ない。足が震える。

「今は機嫌が悪くない。見逃しキャンペーン中。すぐに失せるなら見逃してあげるよ」

チャラ男はおちよくるような口調で、チャラ男は随分とチャラ男のように楽しそうな、卑猥な笑みを浮かべる。

「んなこと……」

ムカつく。選択肢は二つ。逃げるか。闘うか。究極の選択でも何でもない。俺には黒女笑顔を見捨てて逃げるなんて選択肢、選べるはずがない。

「出来るわけねえだろうが！」

叫ぶ。震える足を動かすために。俺の右の拳に全てを込めるために。全身全霊。全体重を右の拳に。全ての思いを右の拳に込めて、チャラ男に殴りかかる。

溜め息。チャラ男は溜め息をつく。その溜め息一つで、俺が圧倒的下位存在に感じる。恐いし勝てないかもしれない。だけど 黒女笑顔をを守るためなら俺は絶対に負けはしない。

ぐつ。俺はそんな言葉を発して倒れる。俺の渾身の右ストレートは、その思いも重さもぶつけることなくかわされ 挙げ句その思いも重さも逆に利用された。カウンター。チャラ男は、俺の拳を避け、掌で俺の顎を突く。これが掌底ってやつなんだろうか なんて考えながら俺は無様にも倒れた。頭も身体も正常に働かない。絶対に負けない 笑ってしまう。無様にも、完璧に負けてしまった。ただこの場合、気絶しなかっただけでも十分及第点じゃないかと思う。及第点。確かに及第点だけど、全く意味がない。結果として黒女笑顔を俺は守れなかった。騎士にはなれなかった。

「お姫様が悪い男に攫われちゃうよ。守らなくて良いのかい？」
チャラ男が、正しくチャラ男のように騎士になれなかった俺を笑う。

どうすればいい。喋ることすら出来ない。

「お姫様。従わないならこの騎士が どうなるか。分かるよね？」

助けに來た俺が、俺が人質に取られるなんて。なんたる滑稽。無様。

溜め息。黒女が溜め息をつく。その溜め息一つ。チャラ男より少し小さな溜め息一つ。俺は、力の無い自分を悔やんだ。黒女は、俺のせいで男に従わざるを得ない。俺のことは気にしなくて良いそう叫びたいが言葉が出ない。それに、その言葉の通り気にしない人なんてそうはいない。

「ほんとに、廻は馬鹿なんだから」

うみせ まわり

海瀬廻。何を隠そう俺の名だ。黒女は俺の名前を呼びながら黒女笑顔という名とは正反対の笑顔を見せる。毎度ながら俺をときめかせる可愛い笑みだ。

黒女は背中に担いだ竹刀を竹刀袋から取り出して構えながら、正に黒女笑顔の名の通りな笑みを見せる。文字通り、危険な笑み。はつきりしていなかった俺の頭は、完全に覚醒する。ぼーっとしていた身体が、今はゾクゾクする。やばい。俺はコロンブスのごとく新世界を発見した。

「覚悟なさい」

一言。凜々しく一言。人質であるはずの俺のことなど関係ないよな一言。その言葉が俺に向けられたものでなく、チャラ男に向けられたものであることに嫉妬する。その笑顔も、その言葉も俺だけのもののなのに……って違う。違う違う。なんて破壊力抜群な黒女笑顔なんだ。思わず変態になるとこだった。

羨ましくも黒女笑顔の笑みと言葉を向けられたチャラ男は、へえと感心したように笑いながら構える。俺のときには構えなかったくせになんて愚痴を言いたくなるが我慢する。

静寂は一瞬。一瞬の後、共に動く。どちらが先に動いたかなんて俺にはわからない。

黒女笑顔は竹刀。チャラ男は素手。剣道三倍段。そのハンデは大きい。チャラ男はそのハンデがあっても勝てると思っっているのだろう。だが、チャラ男よ侮るなかれ。黒女笑顔の剣は、剣道のための剣ではない。人を殺すための剣である。

勝負は一瞬。剣道には下半身に対する攻撃がない。チャラ男は黒女笑顔の面打ちを避けて足を蹴った。黒女笑顔が只の剣道少女なら確実に勝負はチャラ男の勝ちで決定していただろう。しかし、黒女笑顔は只の剣道少女ではなく、侍ガール。そして闘う日本人形。今更ながら、俺が助けに入る必要なんて無かったんだと気付かされる。助けに行ったときは彼女が闘う日本人形であることを完全に忘れていた。

チャラ男の蹴りを横に移動して避ける。華麗な足さばき。蹴り。リーチは長く破壊力も高い。しかし蹴った瞬間、己の身体を支えるのはもう片方の足だけ。そんな状態で黒女笑顔の剣を避けれるはずもなく、チャラ男は黒女笑顔の面打ちを見て頭を腕で防ぐ。面打ち。二度目の面打ち。剣道のルールに則った攻撃。しかしチャラ男は気付くべきだった。只の剣道少女。剣道以外に剣を使ったことのない者には、ルールには関係のない蹴りなど避けれるはずもないことを。黒女笑顔は剣道のルールに縛られていないことを。試合ではなく本物の経験者であることを。ルール無縁の黒女笑顔が、当然二回もルールに則った攻撃するのは全くもって可笑しいことを。二回の面打ち。これは黒女笑顔がルールに縛られていると錯覚させる黒女笑顔の作戦。チャラ男は見事にその作戦に引っかかっていた。頭だけを防御していた。二度目の面打ち。それはフェイク。フェイント。何の防御もしていない人体の急所の一つ、鳩尾に強烈な突きを放つ。防御不可能。そして片足が浮いてるが故に回避不可能。服で場所が良く分からない鳩尾を突けるのはさすが闘う日本人形と言ったところか。

チャラ男の顔は驚愕と痛みで歪み、前のめりになる。俺なら間違はなく死んでるであろうに、気絶すらしないと敵ながらに少し尊敬してしまう。まだ意識のあるチャラ男を黒女笑顔が見逃すはずもなく。黒女笑顔は追い討ちをかける。面打ち。三度目の面打ち。そして真正正銘の本気の面打ち。言葉に表せない謎の叫び。恐らく、面と言っているのだろうが俺には分からない。と共にチャラ男の頭が竹刀で叩かれる。叫び声の中に、鈍い音が微かに聞こえたのは気のせいだと信じたい。そして、華麗な残心。完璧である。まじで惚れ惚れする。闘う日本人形の名は伊達じゃない。

倒れたチャラ男。多分再起不能だろう。を無視して、倒れている俺の元に黒女が近づいてくる。いつのまにか竹刀は背中に担いでいて、いつのまにか黒女は黒女笑顔の名が表すそれとは正反対になっ

「帰るよ」

早く立ちなさいと少しきつい口調で言いながらも、優しく手を差し伸べてくる黒女。ツンデレである。頭も身体も完全に覚醒させられてしまったので、手を掴んで起き上がる。よろめく振りして抱きつこうとも思ったが嫌がられそうなので止めておく。起き上がったらずくに手は離される。もう少し手を繋いでいたかった。

黒女の手の余韻に浸っていると、呻き声が聞こえる。出所はチャラ男。あれだけの攻撃をくらってもまだ意識があるのは真に敵ながらあっぱれだ。チャラ男はよろめきながらも立ち上がる。

「女つてのは恐い生きモンだねホント」

溜め息。チャラ男、本日二回目の溜め息。下を向きながら溜め息をついていたチャラ男が顔を上げる。

「覚悟しろ」

殺意。殺意なんて物は今まで感じたことはないが、恐らくこれが殺意というもの。足が震えてすらくれない。蛇に睨まれたように全く身体が動かない。こいつはチャラ男ではなく本物だ。その言葉を発した俺こそはその言葉の意味を全く分かっていなかった。ただ今分かった。平和ボケした俺とは違って黒女笑顔には殺意なんて意味が無い。当然、竹刀を抜き止めを刺しに行く。

待て。何かヤバイ。チャラ男から何か。何かヤバイ気配がする。チャラ男の突き出した右手の周りに薄っすらとした青いモヤが見える。言うなればオーラのような

「待て黒女！『アレ』はヤバイ！」

全速力。過去最高のスピードで黒女笑顔の元へ駆けて行き、黒女笑顔を無理矢理倒してチャラ男の右手の延長線から避ける。

「ちよっ！」

「いつ……」

何が起きたか分からず思わず声が出た黒女笑顔に、鋭い痛みで思わず声が出た俺。

全く理解不能だが、青いモヤを纏った右手から何かが飛んできて

ギリギリ避けきれず脇腹をかすった。脇腹が綺麗に切れている。

チャラ男は、へえと感心したように笑う。その笑みさつきも見たぞ畜生が。

「廻！」

「大丈夫。かすっただけだ」

そう、かすっただけ。なのに結構痛い。

「お前何をした」

「何だと思う？」

ニヤニヤとチャラ男は笑う。分かる訳ねえだろボケが。チャラすぎんだよ！

「ふざけるな」

俺はチャラ男を睨む。多分今の俺の目には殺意がこもっているはずだ。

「頑張ったご褒美に教えてあげる。これはね干渉力と言われている、単純に言う魔法とか超能力みたいなものだよ」

ふふと笑いながらチャラ男は言う。

「君にはこの力場が見えたんだね」

チャラ男は右手に青いモヤを左手で指差しながら言う。

「ならもうすぐ、君も干渉力を使えるようになるはずだよ。もっとも」

チャラ男が右手を俺の方に向ける。

「君はここで死ぬんだけど」

身体に衝撃がくる。痛みはない。衝撃が来たのは前からではなく横から。横　黒女笑顔のいる方から。黒女笑顔から小さな呻き声が聞こえる。俺と同様、脇腹にかすっただけ。倒れた俺とチャラ男に立ち向かう黒女笑顔。

「今更だけど、出来るだけ君を傷つけないんだよ」

チャラ男は、黒女笑顔に語りながら右手を向ける。

右手から高速の水が飛び出す。ウォーターカッター。

脇腹ではなく黒女笑顔のお腹を貫通する。

血。血。血。黒女笑顔は倒れる。

「く、黒女……」

殺す。純粹なる殺意。チャラ男に対する殺意。

チャラ男は再び右手にモヤを力場を作る。

「あああああああつ！」

意味も無く叫ぶ。叫ぶことでチャラ男の水を跳ね返すことなど出来はしない。

「なっ……」

しかし しかし跳ね返った。

否、跳ね返した。叫んだお陰で跳ね返った訳ではなく跳ね返した。チャラ男の水を跳ね返す。まるで超能力みたいに。そう。チャラ男は自分の発した言葉の意味を全く分かっていなかった。もうすぐ俺も使えるようになる。干渉力。

あらゆるものを廻す力。それが俺の 海瀬廻の干渉力。

跳ね返した。つまり半回転。180度回転。そして跳ね返した水はチャラ男の左足に当たる。

理解不能。そんな顔している。それとも、もうすぐ使えるとは言ったものの、まさかこんなタイミングで使えるようになるとは思っていなかったのか。

「甘いぜチャラ男」

今の俺はこの上なくシニカルな笑みをしているに違いない。

「俺は負けない」

黒女笑顔を守るためなら俺は絶対に負けはしない。

ちっ。チャラ男の舌打ちが聞こえる。

廻す。今のところ俺の攻撃手段はチャラ男の攻撃を利用するだけ。チャラ男は俺の干渉力が跳ね返す力だと思っているはず。ならばその認識の違いを利用する。

不意に全身に感じる寒気。全身が発する危険信号。俺の周囲に青い力場。防御のために俺と黒女笑顔を囲むように張っている俺の力場も青いがこれは俺の力場ではない。色は似ていても全く異質の力

場。チャラ男の力場。俺が張っている力場の中には力場を張れない
みたいだが、俺の力場の周りは完全にチャラ男の力場で囲まれてい
る。

黒女笑顔が只の剣道少女を装った。俺が干渉力を跳ね返す力と誤
魔化している。ならばチャラ男の水も、右手からしか出せないなん
てことはない。手加減。俺達に対して手加減していたのだろう。し
かし俺が干渉力を使えるようになっては、条件は対等。手加減して
る余裕など存在しない。想像するに、力場から高速の水を発射する
力。それがチャラ男の干渉力。

力場から、チャラ男の青い力場から高速の水が、全方位から水が
発射される。その全てを跳ね返す。しかし、たまに跳ね返せないの
もある。干渉力の処理能力の限界ってやつと、跳ね返す意志が無い
と跳ね返らないのが理由だろう。力場が全自動で跳ね返す訳ではな
い。力場に跳ね返す意志を込めて初めてその力が作動する。力場そ
のものの効果は相手の力場の侵入を防ぐだけ。と言っても自分達に
当たる範囲の水を優先して跳ね返すことは出来るために、全方位水
弾は脅威にはならない。

チャラ男もそれを悟ったのか力場が消える。

チャラ男の目の前に力場が現れる。今までとは違う。ドス黒いな
らぬドス青い力場。

さっきの攻撃でチャラ男は、俺の能力の限界を悟ったのだろう。
多分それには力場の強さも関係してくる。ような気がする。今の
俺は干渉力に目覚めたばかりで力場の使い方も余り分らない。故
に、チャラ男の全力の力場で攻撃されたなら跳ね返せるかどうか分
からない。チャラ男もそう考えたに違いない。あのドス青い力場
による攻撃は跳ね返せる自信がない。

「ほんと、驚かしてくれるね君達は」

溜め息。チャラ男三回目の溜め息。手の平を閉じた右手を俺の方
に向ける。

「これで終わりだよ」

チャラ男は、閉じた右手を開く。同時に、力場から高速の大量の水。

「ああ、俺の勝ちだ」

チャラ男は俺の干渉力が跳ね返すものだと思っているはず。ならばその認識の違いを利用する。そう、チャラ男は俺が水を跳ね返すしかないと思っているが、何も水を跳ね返す必要はない。水を少し廻すだけで俺には当たらない。

しばらくすれば力場は回復するだろうが、今のチャラ男にはもう力場を出せないだろう。チャラ男の周りには力場がない。つまり、俺の力場がチャラ男を包むことが出来る。

俺の干渉力は、あらゆるものを廻す力。

その対象は無論 人体も含まれている。

例えば胴体を捻じれば、一瞬でチャラ男は死ぬ。人を殺す勇気なんてある訳も無い。しかし、黒女笑顔を傷付けたチャラ男を許せずはずもなく、両腕を 廻した。

ポキユキユリ。そんな軽快な音が聞こえた。

「gggggggg nんああああああ」

自業自得だよチャラ男。黒女笑顔を傷付けて良いのは俺だけだ……って違う。違う違う。

もう完全にチャラ男は終わった そう一瞬油断した。

周囲に力場が展開される。俺のではなくチャラ男の力場が。チャラ男は限界だった。確かに限界だった。チャラ男。恐らく俺が痛みで限界以上の力場を引き出させてしまった。

ヤバイ。俺もそろそろ限界が近づいている。逸らただけだったとは言え、目覚めたての干渉力で相手の全力を防ぐために相当浪費した。多分もう防ぎきれない。ならせめて、せめて黒女笑顔だけでも

「黒女!？」

消え……いた。周囲の力場も消えている。

黒女笑顔。闘う日本人形。鳩尾に突き。面打ち。いずれもチャラ

男に決定打を与えることは出来なかった。三度目の正直。チャラ男は痛みでまともな思考が出来ていない。故に、剣道のルールに則った場所だからこそ狙わなかった喉に、突きを放っていた。お腹が痛いのか、今回は叫ばなかったみたいだが。

力場から察するに完全にチャラ男は気絶したみたいだ。喉を本気で突かれて何で息出来るかは甚だ疑問だが、一応息はしているので死んではない。本当に、敵ながらあつぱれなタフさだ。

「ていうか、どうやって？」

当然の疑問。黒女笑顔がチャラ男のもとへ走っていく途中で俺は気付くはずだ。気付かないなんて有り得ない。有り得るとしたら、

「まるで超能力みたいだ」

「そゆこと。お腹にくらった後にね、私も力場ってやつが見えるようになって、干渉力が使えるようになるまでじつとしようって思ってた」

さつき使えるようになったのと微笑む黒女は、やはり可愛い。というか、チャラ男は可哀相なまでにタイミングが悪いな。

「さて」

黒女笑顔は、チャラ男に竹刀を向ける。何をしている？

「もう、終わったろ？」

「違うわ。まだ」

黒女笑顔は黒女笑顔の笑みで

「コイツを殺していないもの」

こんな状態になって尚、俺はチャラ男に嫉妬しなければならない。酷く恐ろしく、酷く美しい笑みを向けられているチャラ男に。

「な、何言ってるんだよ黒女。殺す必要なんてないだろ」

「あるわ。はっきり言って、今回は異常よ異常。干渉力なんてふざけた力が出てくるし。っていうか干渉力って何よ。干渉力については後々調べるにしても、コイツは、私はともかく廻が干渉力を持っていることを知っているのよ。干渉力と言われているなんて言うてたから干渉力保持者は他にもいるわ。そして、干渉力保持者が集

まった組織とかがあるはずよ。無かつたらとつくにこの世界は潰れてる。多分コイツもそういう組織の一味。一匹狼でいれるほどの人物じゃなさそうだし。漫画みたいな事言ってるけど、干渉力なんて漫画みたいな。漫画以上にふざけた力がある以上、今までの常識は通用しない。コイツを見逃したら、私達が干渉力保持者であることがバレて、報復されるか組織に勧誘されるかのどちらかよ」

「でも！」

「別に廻に殺せなんて言っていないわ。私がコイツを殺すのよ」

「俺は」

お前に人を殺させたくない。お前に人殺しになってほしくない。

「やめろ」

なけなしの力場を展開する。黒女笑顔の皮肉なことに黒い力場に対して何の効果もないが、それでも。

「本気？」

黒女笑顔は、黒女笑顔の笑みを初めて 初めて、俺に向けた。

「ああ」

俺は黒女からどう思われようと、人を殺す苦しみから黒女を守ってみせる。黒女笑顔を守るためなら俺は絶対に負けはしない。何があるうとも絶対に負けはしない。絶対に。

「殺さないことでどうなるか、ちゃんと分かってるの？」

「当たり前だ。だけど、それでも」

黒女笑顔の持っていた竹刀を掴む。

「コイツを殺すことは俺が許さない」

溜め息。黒女。本日二回目の溜め息。

「ほんとに、廻は馬鹿なんだから」

黒女笑顔。夕方、偶然帰り道に通り過ぎる公園で彼女が所謂チャラ男に絡まれていたので、俺は颯爽と現れて助けるつもりが助けられて漫画以上に漫画みたいな出来事に巻き込まれて。何だかんだで体力の限界で動けない俺を黒女に担いでもらって帰宅中である。つ

いでに言うなら彼女はお腹を負傷中。俺を家まで送ったあとは病院に行く予定である。チャラ男は彼女を傷付けたくないと言っていたのは本当のようで、チャラ男の水は細く、しかも切れ味が良すぎるために、そこまで酷い怪我ではない。といっても一応お腹が貫通している。怪我人の女の子に運ばれる男って……。恥ずかしい。普通逆だろ。彼女の干渉力を使えば一発で帰れそうなものだが、まだその力に慣れていないので例えば俺の身体の半分しか移動出来ないなんてことになるかもしれないために、羞恥プレイを実行中なのである。

「あいつの目的は一体何だったんだ？」

「ん？ ああ、ナンパだよナンパ。あんな強すぎるナンパなんて反則だと思うけど」

笑う黒女は、やはり可愛い。

「ねえ、本当に殺さなくて良かったの？」

「ああ。ていうかそんな軽々しく殺すなんて口にするなよ軽くゲンコツ。」

「まあ」

口を膨らませて怒る黒女は、やはり可愛い。

「黒女」

「何？」

首を傾げる黒女は、やはり可愛い。

「確かに、俺の方が間違っているのかもしれない。でも　それでも俺はさ、お前に人殺しになってほしくないんだよ」

「へ？　言ってなかったっけ？」

「何を？」

「私はもう」

黒女は、黒女笑顔らしく黒女笑顔らしくない笑みで

「人殺しなんだけど」

勝負に挑む前から負けていたのだった。

黒女笑顔。闘う日本人形。その剣は、剣道のための剣ではなく、

人を殺すための剣である。

家で俺は一人、何度も溜め息をついていた。

第1章：第2話「驚双槻」

「ぐうおふっ」

痛い。お腹に衝撃。おお。俺のお腹の上に黒女が座っている。しかもパジャマ。ピンクのパジャマに赤いニット帽。良い夢だ。俺の部屋の俺のベッドの上で俺と黒女の二人。ならばすることは唯一つ。夢だから何をしても許される。

「によ！　によわわっ」

俺が抱きつけば、黒女は可愛い奇声を発す。ふふ、嫌がつているようで実は喜んでるに違いない。少し俺の幼馴染を思い出してしまふような奇声だけど。

どん。どうやら黒女は俺を蹴ったようだ。素直になればいいのに。しかし、ここは俺の部屋だ。もう逃がさな……俺の部屋？

「え？」

現在、空中。俺の家が見える。現在、落下中。

「うお」

何て嫌な夢なんだ。まあ、夢だから痛くはないだろう。多分、地面にぶつかる直前に目が覚めて、起きたらベッドから落ちてるのがオチつてところだろう。地面にぶつかったところで夢だから痛くはないはずだ。痛くない？

あれ？　夢の最初に確かな痛みを感じた気がする。

「え……まさか、これ夢じゃないのかあああああああ！？」

ドウサっ。そんな音と共に地面とぶつかった。痛い。

しかし、幸運なことに落ちたのは家の庭の花壇だ。正直、コンクリートだったら危なかった。花壇は完全に潰れているが、猫か何かの仕業に誤魔化せるだろう。過去最高の目覚ましを体験した俺にもう眠気など存在するはずもなく、庭に隠してある鍵を使って両親を起こさないように静かに部屋に戻る。

「おい、黒女」

えへへと笑い返す黒女に、俺は毒気を抜かれて怒りが消える。女の笑み一つで怒れなくなるなんて、本当に男つてのはツライ生き物だ。

溜め息。昨日たくさんついた溜め息を今日もつく。

「でも、いきなり抱きついてくる廻だつて悪いのよ?」

「そ、そりゃ起きて目の前に黒女がいたら抱きつきたくもなるよ

……」

「もお何それ?」

あははと笑う黒女。

「ていうかお前どうやって入ってきたんだ?」

「忘れたの?」

ニヤリ。なんて音が聞こえそうな黒女笑顔チックな笑み。

「ああ。まるで超能力みたいな」

黒女のお腹の傷は自然治癒で十分な程に傷は細く小さかったらしい。病院に行ったもののすぐに家に帰った黒女は一人干渉力の訓練をつんでいて、もう大体使えている。ずっと溜め息をついていた俺とは全然違う。落ち込む。また、溜め息。

「溜め息ばつかついていると幸せが逃げていくわよ」

まるで子供を相手にしているかのように、メツと俺を叱る。うひ

や。可愛い。

「うつせえ」

「まわりんぐ。ごはんよ」

「ういゝつす」

飯の準備が出来たらしい。

「黒女も早く家に戻って……ってどうした?」

肩が震えてるぞ黒女。

「」

「おい」

「ぶ……」

「ぷ？」

「ぷああひゃひゃひゃっひゃ」

「うお」

いきなり笑い出す黒女。ていうか何だその笑い方は。少しは女の子らしくしろ。まあ、でもこんな変な笑い方をする黒女も可愛いんだけど。

「どうした？」

「だって、だってだってだって、まわりん……ぷああひゃひゃ」

「あああああああ！？」

忘れていた。俺の母さんが何の冗談かいつもまわりんなんて呼ぶことを。というかもう俺の中では当たり前になっていて

「まわりん？ 誰か来てるの？」

母さんが俺の部屋に入ってくる。頼むからまわりんって言わないで。ってヤバイ。朝から女子と二人つきりなんて現場見られたら

「あれえ？ 誰もいないじゃない。まわりんが女の子連れ込んでるのかと思ったのに」

ぶりっ子ぶるなこのポケ母。

「ていうか母さん。いい加減まわりんって呼ぶのやめてくれよ」
まじで。頼む。

「ええ〜。まわりんはいつまでもまわりんなお」

リアルに自分の母に殺意を覚える。ああ、ワイドショーでキレイやすい現代の子供の一人として登場しそうだ。ゲーム感覚で簡単に人を殺したなんて言われるのかもしれない。

つつか、まだ三十三でしかも童顔だからぶりっ子が似合ってるのがまたむかつく。

ぶりっ子な母と会話しながら朝食を取らなければいけないために、相変わらず不快指数の高い朝食だ。

今日は土曜日。学校もない。部活には入っていないために自由な時間。今までの俺なら一人寂しくすごしていたが、今日の俺は一味

違う。ふつ。ふははは。今俺は黒女の家で、黒女と二人で激しく汗を流しているのだ。剣道部の黒女だが、わざわざ俺と二人になりたいたがために部活まで休んでいる。

そう。汗を……。

激しく……。

「死ぬ……」

修業中である。はつきり言って、チャラ男に勝てたのは運的要素とチャラ男の油断が無ければ絶対に勝てなかった。今後同じような事態に巻き込まれる可能性は十二分に考えられるので、修業をしようという話だ。がしかし、帰宅部の俺。基本的な身体能力がはつきり言って低すぎるのだ。それに、マトモに喧嘩もしたことがない。弱すぎである。竹刀を持っていない黒女になら、男と女のハンデ差を利用すれば勝てると思い試合を挑んだが、結果は惨敗。恥ずかしい限り。故に現在、修業という名の虐めをつけている。ちなみに今の俺の服は、ランニングしようと思って買ったが三日坊主で全然使わなかった運動用の服だ。そして何故か、黒女は制服の紺のカーデイガンと白と黒のチェックのミニスカートに茶色いニット帽に竹刀を背負った状態。曰く、外でいきなり襲われたときのために、この服で闘うのに慣れたいそうだ。残念ながら、昨日と同様、スパッツは穿いている。

俺は尋常じゃない程に汗をかいているのに、黒女は全然汗をかかない。シャツが透けると思ったのに残念だ。いつも思っけどニット帽の中、蒸れないんだろうか。現在10月の下旬。少し寒くなってきたから大丈夫なのかもしれないけど、夏真っ盛りの時期もニット帽被ってたし。良くわからない。でも可愛いから良い。

「ほら、廻。力場！」

身体能力の向上をはかる筋トレと同時に、力場の修業も兼ねている。力場。如何に自分の力場で相手を支配出来るか。それが干涉者あれから、干涉力保持者のことを俺らは干涉者と呼ぶことにしているが、案外それが正式名称かもしれない。との戦いにおいて、

一つのキーポイントになる。干渉力。干渉力が使えるようになった瞬間から、何故か使い方は知っている。だけど、知っているだけでまだ上手くは使えない。故に修業。ま、力場の支配は戦略ゲームみたいなもんなんだけど、黒女は戦略ゲームが大の得意って親友から聞いたことがある。で実際、俺は自分の支配したい場所に全然力場を展開出来ない。黒女が凄いのか、俺が駄目なのか。

黒女の干渉力は、力場の中に自分がいれば任意の場所にレポートする力である。弱そうに見えて侮れない。移動する距離に自分の力場の量や強さが関係しても、移動先は自分の力場と全く関係ないのだ。そして力場が足りなくならない限り、普通は戦闘中には自分の周囲に力場を展開するので　　というかしなければ一瞬で死ぬと思う　　いつでもレポート出来るということだ。しかも相手の力場の中にもレポート出来る。そして自分の周囲を力場で囲ったままレポートするので、相手より自分の力場の方が強ければ、相手のその部分の力場は消える。レポートするだけで、攻撃能力は全くないけれど黒女笑顔は闘う日本人形で。干渉力を使った勝負も、俺は一度も自分の干渉力を使えることなく負けてしまう。あんなの反則だよ黒女笑顔。黒女より強い力場を展開していれば、黒女がレポートした瞬間に黒女に俺の干渉力が使えるんだろうけど如何せん黒女の力場操作技術が半端ない。どう頑張っても防げない。

そう言えば、何でチャラ男はあるとき全力で攻撃してきたんだろう。力場を自分の周囲に展開出来る程度には、力を残しておくべきだと思っただけ……。チャラ男は所詮チャラ男だったというところか。そう考えると、干渉者でチャラ男より強いやつなんてごまんといえるのかもしれない。もっと修業を頑張らなければならない。

1時間程修業した後、ちょっと休憩中。ちなみに、修業してる場所は剣道場である。剣道場。そして黒女の家。黒女笑顔。自分の家に剣道場を作れる程の金持ちである。家がでか過ぎる。迷う。トイレ行ったときに、迷って泣きそうになったことは秘密だ。そして、散々歩き回った挙げ句助けを求めるために適当に開けた部屋は、黒

女笑顔のニット帽ルームだった。腐るほどに大量に飾ってあるニット帽を見たときは正直引いた。しかも、俺を探しにきた黒女にその部屋を覗いているところを見つかってリアルにキレられた。死を覚悟してしまうほどに。普通に泣いたのも秘密だ。微妙に掃除嫌いな上に、自分の部屋とニット帽ルームだけは家政婦さん（家政婦さん！）には掃除させない黒女。そんな黒女の部屋に普通に下着とか落ちてて、それを見ても何の反応を示さないのにニット帽を見られてキレるとはどういうことなんだろう。まあ、そんな不思議なところも可愛いんだけど。

ていうか。

「黒女。お前、やつぱちょっと強すぎないか？」

「そんなことないって」

海瀬廻vs黒女笑顔。一般的な武器無し干渉力無し勝負。0勝10敗。0敗。

力場支配ゲーム。0勝10敗。

何でも有りの勝負。0勝10敗。

俺は弱すぎて、黒女は強すぎる。

「まだまだ。私はまだまだ強くなれる」

いつもの黒女ではなく、黒女笑顔でもなく。まるで恋する乙女のようなそれ。今まで、見たことも無いその表情。何だそれは。俺は知らない。そんな黒女。俺は知らない。つつかどうということだよ。強さに恋する乙女ってか？

「これ以上強くなつてどうすんだよ」

溜め息。また俺は溜め息をつく。溜め息癖が出来てしまいそう。

「ひ・み・つ」

恋する乙女のように笑う黒女。可愛い。可愛いけどその笑みの先に俺はいない。つつか。それ以上強くなると恋がマジで結びつかねえ。むう。俺は、何か勘違いをしているのかもしれない。

「廻はもつと強くならなきゃダメだよ？ この先何があるかわからないんだから」

いつもの可愛さを見せる黒女に戻る。この先何があるか分からない。その通りだ。恥ずかしくも俺がしゃばってしまったせいで、チャラ男を逃がしてしまったのだ。そのせいで、きつと俺達に何かしらアクションを起こしてくる。強くなれるだけ強くなるに越したことはない。

「分かってるよ」

「それじゃ、休憩終わり！ 力場も干渉力にも随分慣れたみたいだから次は頭」

「ん？ 何するんだ？」

「力の使い方を考えるの。私のと違って廻の力は応用し放題じゃないの。廻すなんて一言で言っても、使い方だいで化けるし屑にもなる」

「具体的にどうするんだ？」

「漫画を読むの」

「ええ。そんなどうでも良いこと……」

「甘い！ 甘いぞ廻くん！ 何度も言っているけど、今までの常識は全く通用しない！ ならその常識を破壊するためにも、自分の世界を広げるためにも異能力バトル漫画を読まなきゃいけないんだよ！」

「な、なるほど」

少しキャラが変わってる気がする黒女。

「私は今から漫画買ってくるから、帰ってくるまで廻はちゃんと修業しとくのよ！」

ぽつん。テレポートしたのだろう。あんなに元氣有り余ってるなら、休憩中に行ってきたてほしかったよ。力を使つてるところを誰かに見つかってしまったえい。

まあ、黒女がそんなミスをするはずもなく。というか今のところ、黒女は私有地と俺の部屋でしかその力を使わないし移動しない。無論俺もだ。俺達はもう巻き込まれてしまった。しかし、俺達が誰かを巻き込むことは防ぎたい。

しかも、ドジを発揮するのは至極どうでもいいときだけである。
本当に計算でやっているのかもしれない。黒女笑顔。恐ろしや。朝、俺の上に落ちたのも失敗したらしいけど、あれもわざとなのかもしれない。

修業をサボっているなんて思われたら、殺されるので修業再開。

ぐぬぬぬぬ。修業中の海瀬廻だ。

「あ」

上から声。上を見上げる。

ぶちゅ。何かが潰れた音と顔面に痛み。

「ありやりや。ごめ〜ん」

謝る気があるのかないのか分からないのは黒女笑顔。そして黒女の足に潰されたのは俺の顔面。本当にわざとなのかもしれない。それに何でスパッツ穿いてるんだよ畜生。

黒女が、重たそうに持っているのは本屋の紙袋。でかい。ああ、黒女は金持ちなんだよ……。推定三百冊ぐらい。どうやって持ってきてきた。車で持ってきてきたに決まってるか。黒女は金持ちである。

「それじゃ、読むとしますか」

ピ〜ンポ〜ン。

「あ、お客さん。廻はそれ読んで。ちゃんと常識をぶち壊しながら読むのよ」

「……………らじゃ」

漫画を読み始める。

へえ。どうせ微妙だと馬鹿にしてたが、中々どうして。

「お〜っす廻」

元気な声が聞こえる。黒女の声ではない。これは

「双槻」

驚双槻。俺の幼馴染。幼馴染という鼻屑目を抜いても美少女である。茶髪短髪でボーイッシュな美少女。なんていうか妹に欲しいや

つだ。美少女だけど少々少女すぎるところがある。小学生に間違われて怒っている鶯を良くみる程に。性格も小学生。協調性なし。故に部活には入っていない。というかソフトボール部を追い出されている。

黒女笑顔と鶯双槻。我が高校の二大アイドル。奇しくも二大アイドル二人と交友を持つ俺は男子に良く羨まれて優越感に浸ることは多い。黒女笑顔がその美しい容姿と常にニット帽を被っていることと頭の良さと剣の腕で有名であるならば、鶯双槻はその可愛い容姿と行動と口調で有名である。爆弾少女。爆弾のように周囲に被害をもたらす少女である。幼馴染としては迷惑な行動ばかりするやつだ。俺の好みとは違うのでどうでも良いが、ボクっ娘である。口癖は「むに」。周囲には萌えキャラとして扱われているが、幼馴染である俺にとっては完全に変質者だ。

ていうかむにむに星人だ。身体は全くむにむにしていないが。むしろツルペタ星人である。

「むに？ 何で剣道場で漫画なんか読んによ？」

「ん、まあ色々あって」

ま、確かに剣道場で漫画読んでる男なんて、意味不明だ。

「で、どうしたんだ？ 双槻」

「廻と笑顔ちゃんに用があっただに。廻の家に廻がいなかったから笑顔ちゃんの家に来たんだけど、二人一緒にいたとはねえ。しかもこんなところで二人つきり。ムフフフ」

「な、なな、何想像してんだよ」

「むに。ボクは応援するんだに。ムフフ」

「その笑い方はやめると言ってるだろ」

女だからまだ許せるとしても、男だったら間違いなく捕まる笑みだぞそれ。無論、口調も捕まるそれである。

「ボクの勝手なんだに」

に、だ、と舌を出す。そこはいくただらと突っ込みたくなってしまうが無視だ。

「あゝ、はいはい」

妙に子供っぽいそれに、思わず手を撫でてしまう。

「むゝ、子供扱い許すまじ」

むむむと唸る鶯。

「ははは」

「むにゝ。むにむに」

相変わらず変質者すぎる。正直幼馴染だけどもに意思疎通を出来る自信がない。むにむに星人。いつも、むにむにしそうな何処かしら愛嬌のあるゲテモノ人形をむにむにしている。

「で、俺に何の用だ？」

「むに。そんなのはどうでもいいのだ。ボクも漫画読むの」

自由奔放。鶯の性質の一つだ。何ていうか、最悪だ。

「じゃ、みんなで漫画タイムだね」

ぐ。鶯のせいでその存在を完璧に忘れていた黒女笑顔だ。正直、鶯がいると余裕がなくなるんだよな。まるで失恋のキューピッドのようだ。鶯双槻。むにむに。

漫画。俺の読んでいる漫画。平凡な高校生が異能力バトルに巻き込まれていく話である。俺もこんなふうに関き込まれていくんだろうか。しかし、決定的に違うのは主人公がまさに主人公をしているところだろう。俺なんて……。俺が主人公の物語があるとしたら、ひどく情けない物語になるに違いない。漫画の主人公は、見事好きな女を守っている。俺は見事好きな女に守られている。つうか俺、位置的に主人公よりヒロインだよな。キャラクター的に俺の大嫌いな、何も出来ずに守られるだけの役立たずヒロイン。主人公の黒女笑顔に守られる存在。その癖して、無意味な奇麗事で主人公の邪魔をする。まさに俺だ。落ち込む。はあ。溜め息だ。

「むに。溜め息だ。幸せさんが逃げていくに」

「ああ。そうだな」

「私のときは「うつせえ」なんて言つてたくせに……」

全然似てない俺の真似をしながら拗ねたように言う黒女。

「ち、違うよ!」

好きだから逆に反発しちゃうってやつなんだよ。そんなことは言いたい、言えるはずもない。分かってほしい。シンデレしちゃうような気がする自分が嫌いだ。

「むにに」。ムフ」

鶯がボクは全部分かっているよなんて言いたげな顔をしていやがる。お前にだけは分かってほしくない。

「そんなことよりほら! 漫画読もうぜ漫画!」

「はいはい」

「うう」

印象度ダウン。

「むにむに」

むに。

「ほえあゝ。こんなことしてみたいんだに」

そういつて鶯が俺に見せてくるのは、爆発の異能力が使われているシーン。

「ぶっ」

鶯に似合いすぎだ。

「む」

「ああ、お前なら、いつか出来るようになるよ」

「むに。爆発少女鶯双槻だに」

「あ、ああ」

自分が爆発少女って呼ばれてることを知つての言葉なんだろうか。

1冊。2冊。3冊。4冊。5冊。6冊。7冊。8冊。9冊。

「むに。飽きた」

ああ。いつかこうなるとは思っていたよ。飽き性。それも鶯双槻の性質の一つである。

「なあ、どうすんだよこれから。あいつがいたらどうしようも無いぞ」

「分かってるけど、鷺ちゃんに説明する訳にはいかなから普通にするしかないわね」

「に。なぐに二人でコソコソしてるんだにつ！」

「あ、いや。その〜」

「二人だけの世界……。むにむにだに」

「あ、あはは」

乾いた笑みしか出来ない。

「あら？ 鷺ちゃんも私達の世界に入る？」

「にわ！ まさかの3Pだに！」

「ちょ、何言ってんだよお前ら！」

「廻。顔が赤いわよ？」

「廻はうぶだから仕方ないに」

くっ。こいつら……。

あははと黒女は笑う。むににと鷺も笑う。意味不明である。

「そういうば、漫画飽きたんだろ？ じゃあお前の用って何なんだよ」

「むに」

そう言って鷺は、自分の読んでいた漫画を掴み

「漫画ってさ、有り得ない力ばかりだよに。こんなの現実で使われたらどうすればいいんだろうね？ ねえ、笑顔ちゃん？ ねえ、廻？ こんな力、実際に使われたらどう思う？」

「っ……………」

俺達に見せてきたページには、高速の水を発射する力が使われている。正に、チャラ男の

「干渉力」

鷺は、いつもの変質者ばりな豊かな表情と違い全く無表情で言う。

「双槻……。お前は誰だ？」

むにむにしているのは、人形だけ。

「笑顔ちゃんと廻が闘った男が所属していた干渉者の組織『Uの世^{ダブルイ}界^{クスイ}』所属 『非論理爆弾』」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3094f/>

ニセニセイギ

2010年10月28日08時23分発行